

フィルム・コメンタリー 9月30日号  
ディレクターズ・カンパニーからアルゴ・プロジェクトまで③  
ATGのこと

(承前) 前回ATGについて触れましたが、少し脇道に逸れますがATGについて述べていきます。ATGの正式名称は、日本アート・シアター・ギルドです。1961年に発足し2018年に東宝に吸収合併されるまで半世紀以上に渡って日本映画界に大きな影響を与えました。その発足を迎れば、川喜田長政（1903~1981）の設立した東和商事合資会社に行き着きます。設立は1928年、ヨーロッパ映画の輸入・配給を手掛け『自由を我らに』『巴里祭』『望郷』『民族の祭典』といった名作を日本国内に紹介しました。敗戦を経て1950年代を迎え、日本でもアジア映画やポーランド派・フランスヌーヴェルヴァーグの影響もあり芸術映画への志向が高まると、1957年には勅使河原宏（1927~2001）、羽仁進（1928~）といった若手映画作家がグループ「シネマ57」を結成し実験映画の製作に取り掛かりました。当時、東和映画（東和商事から戦後社名を変更）の副社長だった川喜多長政の妻川喜多かしこ（1908~1993）が、芸術映画を専門に上映する映画館（アート・シアター）を作ることを目指し、東宝の協力を得て1961年ATGが発足します。このとき東宝は資本金600万円と福岡東宝名画座を含む全国の六つの映画館を提供します。そして、第1回配給作品はポーランド映画『尼僧ヨアンナ』（1961 イェジー・フランチシェク・カヴァレロヴィチ監督）でした。以降、フェデリコ・フェリーニ、ジャン＝リュック・ゴダール、サタジット・レイの作品を日本に紹介するという快挙を遂げるのです。（また、上映機会の少ないアジア・アフリカ・中南米など欧米以外の国々の作品を紹介したエキブ・ド・シネマ運動を起こしたのも川喜多かしこであり高野悦子が総支配人を務める岩波ホールがその拠点となりました）

こうして芸術的配給のみ行っていたATGは、製作にも乗り出して行くことになります。ATG方式として有名な製作手法は、製作費は一千万円とし、ATGと制作者が500万円づつ折半し、ATGの上映館で一ヶ月を原則として上映するというものであり、企画段階で検討はするものの、ATGは製作に関しては一切口を挟まないというものでした。当時の製作費は1本当たり六千万円と言われていて、かなりの低予算作品しか製作できませんでした。あまりに自己主張が強く、娯楽性のかけらもない作品を作る傾向にあった大島渚は松竹を退社し、自ら「創造社」なるプロダクションを設立し、ATGで『新宿泥棒日記』（1969）『少年』（1969）『東京戦争戦後秘話』（1970）『儀式』（1971）といった作品を積極的に発表します。松竹ヌーヴェルヴァーグと言われた吉田喜重も『エロス+虐殺』（1970）『煉獄エロイカ』（1970）『戒厳令』（1973）を篠田正浩は『心中天網島』（1969）『卑弥呼』（1974）を世に送り出します。フランスのヌーヴェルヴァーグ、イタリアのネオレアリズモ、アメリカのニューシネマなど、時代の変わり目には若者文化の中から革新運動が出現します。ATGはそうした運動の格好の、作り手そして観客側の受け皿になっていたことに間違いのないのです。1960年代から1970年代の自由闊達な雰囲気とともに記憶されるべき、映画会社と言えます。もともとの設立の趣旨が、芸術映画および前衛映画の紹介であるがゆえに、いずれも先鋭的な感覚をもつ映画人が集まったのでした。ATG公開作品の一覧をご覧になれば、日本映画界におけるその重要性は十分に認識できるはず。ちなみに1980年にファン投票で選ばれた作品の上映会が行われましたが、その際選ばれた作品は、『絞死刑』（1968大島渚 キネ旬3位）『地の群れ』（1970年熊井啓 同5位）『人間蒸発』（1967今村昌平 同2位）『肉弾』（1968岡本喜八 同2位）『初恋・地獄篇』（1968羽仁進 同6位）『書を捨てよ町へ出よう』（1971寺山修司 同9位）『心中天網島』（1969篠田正浩 同1位）『無常』（1970実相寺昭雄 同6位）『あらかじめ決められた恋人たちへ』（1971清水邦夫・田原総一朗 同19位）『儀式』（1971大島渚 同1位）の10本でした。どれも実に懐かしい作品です。いずれも強い製作意図と確固たる制作技術に支えられた傑作揃いです。

ATGが製作を支援したこうしたメッセージ性が強く、エンタテインメント性の低い、芸術映画の中には興行的に失敗するものもあり、経営は徐々に困難になっていきます。1979年に井関種雄社長が辞職し、佐々木史朗が社長に就任します。そして、佐々木社長率いるATGは大物よりも、大森一樹、森田芳光などの若手監督や、長谷川和彦、井筒和幸などのポルノ映画出身の監督を積極的に起用するようになりました。その中で、森田芳光の『家族ゲーム』（1983）のヒットはそのような経緯で生まれたものです。重要な映画人を育成したものの、ATG自体は徐々に弱体化していき、1992年、新藤兼人監督『瀬東綺譚』を最後に活動を停止します。その後、ATGは長らく休眠会社として存続していましたが、東宝に吸収合併され、60年近い歴史に終止符を打ったのは2018年のことでした。ATGの二代目社長として在任中の佐々木史朗は、1989年に伊地智啓（キティ・フィルム）岡田裕（ニュー・センチュリー・プロデューサーズ）増田久雄（ブルミエ・インターナショナル）山田耕大（メリエス）宮坂進（ディレクターズ・カンパニー）とともに「アルゴ・プロジェクト」に参加することになります。（続く）